書評

『子どもたちのいる宇宙』

本田和子著
三省堂選書 77
一九八〇年

昨年の秋のこと、私どもは一冊の本を手にし、机上で心充たされる読書の時をもつことができた。叙述の確かさからくる意味の明瞭さ、それに加えて、考えの発展の独自性は、そういう著書を残念ながら多く持たない児童学の分野において、また他分野からの子どもに関する著作を雑えてみても、第一等の耀かしさを放っていたと思われる。

「子ども、小宇宙の主管者としての」という、なよやかで慎ましやかなものいいの序章で、しかし、著者は、判然と子どもを以下のように捉える。〝成人への過程を急がされている旅人でもなければ、未来への「可能態」であるだけでもない。それにもまして、一個の「現実態」として「いま」を生きる存在であり、そのゆえに、固有の生の様態の所有者である〟と。〝発達という直線的な系における差異〟のみで子どもを把握するのではなく、〝「子ども」と「大人」とを二つの極と位置づけ、「大人」から「子ども」へと手渡される諸影響〟にも弥増して、〝「子ども」から「大人」へと贈られる贈物への目配り〟をこそ忘れてはならないと。

さて、子ども固有の生の様態を、著者は、〝見える姿〟から出発し〝心の世界〟へ向って解明してゆく。子どもとかかわり深い六つの動詞「ねる・とぶ・めぐる・ほる・たべる・うつす」から、子どもたちの身体の言葉を読み解くことを試みるのだ。

例えば、「とぶ」に収められている滑り台での事例の解釈は、次のようなものである。

帰宅の時間が近づいて帰り支度が始まっている。しかしYだけ外で遊んでいて部屋に入ろうとしない。とうとう保育者の迎えが来ると、Yは滑り台に向い、サーッと滑り降り、サッサと部屋に駆け込む。著者は言う。――Yは〝「いま」への執着が強くて「未来」への移行が困難であり、しかも入っていかねばならない部屋は、負の誘引性のゆえに遙か遠くに距たって見える〟〝それら相対峙する二者

を速やかに接近させ融合させるための呪術的儀礼として、彼が選んだものが、滑り台の一滑りだったのである〃と。

「滑り降りる」という、一瞬、無意味な付けたりとも見過ごされる現れから、心の中で綻び、自身でもどうしようもない、もそもそとした裂け目を――、凛とした身体の活動で鮮かに生きる子どもの「かかる生」を――、すばやく読みとるのだ。すばやい読みとり、しかし、それだけに留まらない。著者は、自己の心の奥深くにまで感性の錘を謐かに下ろしていく。そして世の中に、これほどまで豊かな、しかし悲しみを湛えた文章はないのではなかろうかと思える、本書の中でひときわ目を射る六行の文を綴るのだ。

すなわち、砂場の一隅に穴を掘り、宝物の泥団子を埋める子どもの行為について述べ、次にこのように続く。〃これらのことがらに対して、私ども大人は、しばしば「たわいもない気まぐれ」と看過し、その意味を読むことを怠る。それは、もしかしたら、己れの無力さから眼をそらす手段ではないか。幼い人たちの素朴な生き方の中にさえ、私どもの視野から逃れてその接近を拒む領域があることに気付くのは、この上なくさびしいことだろう。しかも、それが、子どもたちにとって「存在の根」であり、「人格の核」であることを自覚するのは、大人にとって限りない無力感の自覚にほかならないのだから。〃

子どもたちの心のゆらめきを、ひたすら読み解いてきた著者のこの言葉を、どう受けとめればよいのだろうか。「たわいもない気まぐれ」とあまりに見過ごしてきてしまった私どもは、この言葉から「優しい慰励」を読んではならないだろう。かなしみが湧き出でずにはいられない、人と人との真のふれあい、そしてこのかなしみを直視することに他ならない保育の営み。著者の禁じえないかなしみは、或る思索家が、DESOLATIONとCONSOLATIONで表わした悲しみと同質のように私には思われてならない。

著者は、現実の可視的な発達事象を、対象的に認識し、前後関係などを意味づけ、抽象的に理解していくのではない。現実の現れを、一挙に照明し、対象全体を直覚的に理解していくのだ。それは、対象（つまり子ども）の内部へ入り込み、内部の動きのままに直観して把握することであり、「ある意味で想像的に対象を経験してゆく仕方」（辻邦生「バルザックの開くもの」）と言えるものかもしれない。かかる接近によってこそ、他の児童学の書物が摑みえなかった、子どもたちの「存在の根」が感得されたのだと思われる。

本書にひき込まれることにより、「子どもたちの小宇宙」のどこかで、本田和子その人が、カタッと宇宙の仕掛をはずしたような、小さな音をたてたのを、私は今、ここに感ぜずにはいられない。

（皆川美恵子）